

# 帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
vol.31

## 「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」を  
イメージしました。

## CONTENTS

特集1 みなとびあは二人の愛を誓いあう場?! P.2~3  
—施設利用の例から—

特集2 新潟地震展 P.4  
～体験・記録・復興の五十年～

歴史さんぽ	スポーツ彫刻	P.5
おすすめの一冊	「絵図学入門」	P.5
みなとびあ 研究notes	鍛と鍛冶屋	P.6
館長日記	食えない粽	P.7
収蔵資料紹介	痘瘡流し	P.7
博物館あちらこちら	常設展示室入口	P.8



旧税関庁舎前で結婚の記念撮影をする  
神林洋一さんと大徳めぐみさん。お幸せに!

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.31

■ 帆檣成林「はんしょうせいりん」第31号  
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
■ 印刷／株式会社ウエッパ

## 【たいけんのひろばプログラム】 楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
7月5日(土)・6日(日) 14:00~15:30	ワラ紙をつかって 七夕がざりをしよう	ワラから紙をつくり、七夕の短冊にして、願い事を書き入れます。他にもいろいろな七夕飾りをつかって、七夕の笹飾りをしましょう。	不要・材料がなくなり次第終了・無料
7月12日(土)・13日(日) 14:00~15:30	「青写真」で 手ぬぐいづくり	太陽の光で絵や模様を写しとる、不思議な手ぬぐいをつくります。	不要・先着10人・300円
7月26日(土) 14:00~16:00	みなとびあ めめん部	わたから糸をとり布を織るという手仕事を、博物館資料を使って再現する試みです。	お問い合わせください
7月26日(土) 14:00~15:30	むかしのあそび 「紙芝居」	4場面紙芝居をつくってみましょう。	不要・無料
7月27日(日) 10:30~12:00	親子で自然体験 夏	夏のみなとびあ敷地をたんけんしながら、自然にふれあい楽しくあそびます。	7月24日(土)必着 未就学児とその保護者20組・無料
8月2日(土)14:00~16:00 8月16日(土)10:00~16:00	たいけん塩づくり ①②	古代の新潟で行われていた、土器を使つての海水からつくる塩づくりに挑戦します。	7月24日(土)必着 2日間参加できる小学生以上10人・200円
8月6日(土)・7日(日) 14:00~15:30	鏡をつくってみよう ①②	古代の鏡づくりになぞらえて、オリジナルの鏡を鑄造して磨きます。	7月26日(土)必着(応募多数の場合抽選) 2日間参加できる小学4~6年生10人・300円
8月8日(日) 14:00~15:30	ボンボン船をつくらう	ろうそくの火で空気をあたためて進む力にする、ボンボン船をつくります。	8月1日(土)必着 小学生以上15人・200円
8月10日(日) 14:00~15:30	地震展関連・実験!新潟地震 —「エッキーをつくらう」—	本格的な液化化実験装置を体験し、ペットボトルを使った簡単な液化化実験装置をつくります。	不要・先着20人・無料
8月17日(日) 14:00~15:30	明かりづくり	空きビンを使って、あんどん風の油を使った明かりをつくります。	8月8日(日)必着 小学生以上15人・50円
8月31日(日) 14:00~15:30	明治時代の 写真プリント体験	鶏卵紙(けいらんし)を使った明治時代の写真を体験してみます。	お問い合わせください
9月13日(土)・14日(日) 14:00~15:30	布を織ってみよう	簡単な織り器を使って、裂き織りのコースターをつくります。	不要・小学生以上先着15人・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。プログラムは予定となっていますので、詳細は当館までお問い合わせください。

## 現在開催中 企画展 新潟地震展

昭和39(1964)年6月16日の「新潟地震」発生から50年目を迎えるにあたり、市民の体験と記録、都市の復興に動いた人々の営為を紹介しつづけます。

【会期】2014年  
6月14日(土)~8月24日(日)  
【休館日】6/23(月)・30(月)  
7/7(月)・14(月)・22(火)・28(月)  
8/4(月)・18(月)

観覧料	一般	500円(400円)	※小・中学生は土日祝日無料 ※企画展示観覧券で常設展示も御覧いただけます
	大学生・高校生	300円(240円)	
	中学生・小学生	200円(160円)	

## 関連イベント

- 講座 新潟地震映像上映会  
内容:「新潟地震」「復興のあゆみ」などの映像上映  
日時:2014年6月28日(土)・7月26日(土) 13:30~15:00 ※2回とも同じ内容  
会場:2階ミュージアムシアター 申込:事前申込不要・参加費無料
- 講演会 「歴史的な地震研究の最前線」  
内容:新潟地震をはじめとする過去の地震の研究が、どのように防災や減災に活用されているかを紹介。  
日時:2014年7月20日(日) 13:30~15:00  
会場:2階セミナー室  
講師:卜部厚志(新潟大学災害・復興科学研究所准教授)  
定員:80名(多数の場合抽選)・資料代100円  
申込:往復はがきまたはメールに住所・氏名・連絡先電話番号を記入の上「記念講演会係」まで(7月13日必着)
- 体験イベント 「実験!新潟地震—「エッキーをつくらう」—」  
内容:本格的な液化化実験装置を体験し、ペットボトルを使った簡単な液化化実験装置をつくります。  
日時:8月10日(日) 14:00~15:30  
会場:みなとびあ1階たいけんのひろば  
定員:20名 申込:事前申込不要・参加費無料

## 次回開催 第11回むかしのくらし展「冬の新潟」

第1回のむかしのくらし展として開催し好評だった「冬の新潟」を、10年ぶりに内容を新たにして展示紹介。

【会期】2014年9月6日(土)~12月23日(火・祝)  
【休館日】9/8(月)・16(火)・24(水)・29(月) 10/6(月)・14(火)・20(月)・27(月)  
11/4(火)・10(月)・17(月)・25(火) 12/1(月)・8(月)・15(月)・22(月)  
【観覧料】無料 \*常設展の観覧は有料です。

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。  
時間:13:30~15:00 | 申込:不要(当日受付・定員80人程度)  
会場:本館2階セミナー室 | 資料代:100円(資料のない回は無料)

- 7月の講座:7月27日(日)  
「近世新潟町屋敷敷地周縁の土地利用—船団を中心に」 講師:安宅 俊介
- 8月の講座:8月24日(日)  
「シリーズ 新潟の美術⑥ 〈スキャンダル〉」 講師:木村 一貫

## 博物館 あちらこちら 常設展示室入口

2階にある常設展示室へは、吹き抜け空間に設けられた短い空中廊下を渡って入っていきます。その空中廊下は、明治43(1910)年竣工の二代目新潟市役所庁舎をイメージしたL字型の建物と、博物館として新たに建てるにあたり付け足した箱型の建物とをつなぐ橋です。市役所のL字型建物の内側は庭園でした。その部分に、展示室や収蔵庫のある3階建ての建物を併設したのです。  
空中廊下を渡ると、やや暗い空間へ入ります。水音が聞こえ、足元には青い波紋のような模様が見え、常設展示の観覧がはじまります。日常の空間から、水とともに歩んできた新潟市の歴史を語る空間へと導く、建築上の演出にもなっています。



開館10周年という節目の一年がはじまりました。これを機に、本誌の連載も一部新しくなっています。一つは「歴史さんぽ」。博物館を飛び出し、地域に残る歴史資源を学芸員の視点でご案内します。また「博物館あちらこちら」では、展示品だけではなく見どころを紹介し、みなとびあの新たな楽しみ方を提案します。10年目のみなとびあで市民の皆さまがお新しい発見をできるような、そんな話題をお伝えしていきたいと思っています。(中村)

■お問い合わせ・申込みは博物館まで…  
新潟市歴史博物館 みなとびあ  
住所:〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
Tel:025-225-6111 Fax:025-225-6130  
E-mail:museum@nchm.jp http://www.nchm.jp  
【休館日】毎週月曜日、祝日の翌日 【開館時間】9:30~18:00





# みなとぴあは一人の愛を誓いあう場?! —施設利用の例から—

小林 隆幸

春・秋の結婚シーズンを迎えると、みなとぴあの敷地では、頻繁に新郎・新婦の姿を見かけるようになります。この光景は、今やみなとぴあの風物詩になっています。みなとぴあは「結婚式ができる博物館」として、これまで多くのカップルがこの場で愛を誓い新たな生活を始めています。



みなとぴあでの結婚式

## ■施設の特徴と施設の貸し出し

みなとぴあは新潟市の歴史学習の場だけでなく、さまざまな活用をされています。これも館の特徴の一つです。みなとぴあは明治二(一八六九)年建設の旧新潟税関庁舎を中心に施設整備されました。本館は明治四十三(一九一〇)年に建てられた新潟市役所庁舎の外観をモデルに新築、また昭和二(一九二七)年建設の旧第四銀行住吉町支店建物が移築・復原され、さらに旧新潟税関の荷揚げ場や芝生広場などの外構整備がされています。この中で、旧第四銀行住吉町支店一階は、現在、テナントとして株式会社欧州どう栽培研究所がレストラン・ぼるとカーブドッチを運営しています。

これらの施設のうち、本館の企画展示室やセミナー室、旧第四銀行住吉町支店の日本間と会議室、そして芝生広場が一般へ貸し出され、博物館活動以外で多くの方々に利用されています。本館の企画展示室やセミナー室の利用は、歴史に関する活動に限定されていますが、旧第四銀行の貸室は、営利目的ではない限り用途は比較的自由です。屋外の芝生広場であれば、行商などの営利目的であっても利用が可能です。

## ■歴史学習以外での施設利用

歴史的な建造物群と港町を感じさせるウォータフロントの両者からなる景観は、施設の利用価値を高めています。最近ではこうした周囲の景観を素材にした屋外の施設利用も目立ってきています。昨年の十一月と今年のゴールデンウィーク期間に行われたプロジェクト「クシオンマッピング」もその一つです。博物館本館の外壁をスクリーン代わりに映像を映し出すもので、建物の形や凹凸面に合わせて映像をマッピングさせるおもしろさが見どころになっています。博物館の開館時間外の夜間に行われ、ゴールデンウィーク期間中の開催では六万八千人の来場があったといえます。また、今年六月八日には、ドイツ・ニーランドのミッキーマウスが当館の敷地を会場に「ミッキーマウスがこどん」というダンスイベントを開催しました。当館が会場に選ばれた理由に、新潟らしい港町の景観があげられています。

こうした屋外の大規模な施設利用は特異な例ですが、施設の特徴や景観を活かした利用は開館当時から行われています。その中心が旧第四銀行住吉町支店です。ギリシア神殿風の重厚な石張りの外観を持ち、内装には大理石・漆喰、当時は高級木材であったラワン



プロジェクションマッピング

## ■ブライダル関連の施設利用

その中でも注目されるのは、冒頭で触れたようにブライダル関連の利用です。旧第四銀行住吉町支店内のぼるとカーブドッチをレストランウエディング会場とし、記念撮影やライスシャワー、またパーティーのアトラクション等で屋外の芝生広場なども利用されることがあります。稀に博物館の活動とそれが鉢合わせになることもあります。左の写真は新郎・新婦の写真撮影と土器作りの野焼きが広場で遭遇した時の状況です。こうしたハプニングが見られるのも、みなとぴあを会場にしたウエディングならではのことでしょう。

みなとぴあが開館した平成十六年以来、多くの新郎・新婦が、みなとぴあで祝福を受けています。ぼるとカーブドッチによると、最近のレストランウエディングの数は、平成二十四年が二十七件、二十五年は十四件です。一年を通じては、十月・十一月の秋がそのピークの様です。洋装・和装を問わず礼服姿の方々が、パーティーついでに本館内を見学されている光景もしばしば見られます。

県内での博物館ウエディングの例として、ほかに北方文化博物館があります。北方文化博物館は江南区沢海に所在する豪農・伊藤家の住宅として建てられた建物群で、主屋は明治二十

(二八八七)年、大広間や新座敷は明治二十二(一八八九)年建築の歴史ある建物です。いずれも国の登録有形文化財になっています。ここでは、平成二十四年に六件、二十五年に三件の結婚式があったことを、館の学芸員加古川茉莉恵さんに教えていただきました。全国的な例では、愛知県犬山市の博物館明治村が「明治村ウエディング」として館のホームページでも案内しています。そのコンセプトには「ノスタルジックな結婚式」とあり、明治時代に建てられた歴史のある教会での挙式、温かなひとときを村内で過ごす披露宴、ノスタルジックな街並みを活かした写真撮影、村を訪れた人々から祝

福されることなど、記憶に残るオンラインウエディングが提唱されています。明治村では、相談会も含めて結婚式を総合的にプロデュースする体制がとられています。

みなとぴあも北方文化博物館も明治村も、博物館であり文化財の建築物がその会場になっています。明治村のコンセプトにある「ノスタルジックな結婚式」が、文化財である博物館を結婚式の会場に選ぶ方々に共通している思いなのでしょう。やや強引な解釈ですが、当館のような博物館で結婚式をされる方々は、無意識のうちに博物館の信頼性に二人の絆の確かさを照らし合わせているのかもしれない。また、これから築く家庭の幸せが永く続くことを、永く伝えられてきた文化財に重ねているのかもしれない。その家族の歴史は博物館から幕が開けました。次はご家族で博物館に会場していただき、家族の歴史の原点を確認し、同時にその背後にある新潟市の歴史に思いをはせていただきたいと思います。

## ■みなとぴあの施設活用について

みなとぴあの設置目的は、市民の社会的活動や文化的活動に寄与することとされています。そこに文化的生活を含めてもよいでしょう。歴史学習とともにどのような施設活用ができるのか、市民の皆さんと一緒に探っていきたいと考えています。

(こばやし たかゆき 学芸員)



新郎新婦の写真撮影と土器焼き



# 新潟地震展

田嶋 悠佑

## 体験、記録、復興の五十年

昭和三十九（一九六四）年六月十六日に新潟地震が発生してから今年で五十年になります。新潟市歴史博物館ではこの節目に新潟地震を紹介する企画展を開催します。

この五十年の間、新潟地震の被災経験は、災害への備えや避難計画、都市の再建・復興に生かされてきました。そうした知見の背景にあったものは写真や映像、絵画、文章といった資料とそれを元にした研究でした。しかし時間が経つにつれ記憶が薄れる一方、資料も取捨選択されていきました。その過程で人々は何を残してきたのか。展覧会では今日まで残された震災や復興に関する資料を展示し、新潟地震の記録の継承について考えます。

### 一、新潟地震を見る目 — 写真に残された市民のまなざし

新潟地震がもたらした昭和石油火災、昭和十一年の落石、川岸町原菅アパートの倒壊といった光景は、新潟地震を象徴す



昭和石油火災の黒煙（新潟市蔵）昭和石油火災の黒煙は、新潟地震の象徴として多くの写真が残された。

### 二、記憶の断片をたどる — 映像・画像・文書

新潟地震で被災した人々やその光景を目の当たりにした人々の体験は、写真のほか様々な媒体（メディア）に残されています。

「映像」は関東大震災の時にすでに用いられていましたが、時間を要する「ニュース映画」の方式で配信されました。テレビの本放送が開始されると映像の速報性は飛躍的に向上し、新潟地震も発生当日には震災の様子が全国へ配信されました。

### 三、震災と復興の跡 — 街角に残る新潟地震

新潟地震と同じ年の十二月に「新潟地震復興計画」が発表され、生活復旧と都市再生のプロジェクトが実行に移されていきました。

新潟地震当時は、苦しい記憶を思い起こさないように災害の跡をなくし、一日も早い町の復興を目指そうという考えが一般的でした。

地震直後は傾いたビルなどが見られた新潟市内も、二、三年の間に街並みが整い、地震の痕跡はほぼ消されました。一方、復興を象徴するモニュメントの設置を求める声から、建設されたのが「新潟県民会館」でした。

新潟地震の痕跡はこのようにして消えていったのですが、注意深く見てみると新潟の町にはわずかに震災の痕跡や、復興の過程に深いかかわりのある場所が今も残っていることがわかります。

展示では昭和十一年の落石や新潟地震の被災経験は、災害への備えや避難計画、都市の再建・復興に生かされてきました。そうした知見の背景にあったものは写真や映像、絵画、文章といった資料とそれを元にした研究でした。しかし時間が経つにつれ記憶が薄れる一方、資料も取捨選択されていきました。その過程で人々は何を残してきたのか。展覧会では今日まで残された震災や復興に関する資料を展示し、新潟地震の記録の継承について考えます。

災害の記録を残そうとするとき、そこには様々な心理的・物理的困難が存在します。そもそも災害の直後には記録の保存にまで手が回らないことがほとんどです。仮に保存が試みられたとしても災害の痕跡であれば被災者の間で保存の賛否が出ますし、また写真や映像はその災害が一段落すると埋もれていくものです。

しかし新潟地震の記録は、記憶と体験を伝えようとする人々の強い意志や努力によって今日に残されてきました。こうした先人の試みに学び、より多くの市民の方々に地震の資料を見ていただいて、震災の記憶・体験を継承する一助になれば幸いです。

（たじま ゆうすけ 学芸員）

## 歴史さんぽ

### スポーツ彫刻

新潟市中央区女池南・鳥屋野運動公園内



鳥屋野運動公園の駐車場に入り、一番奥に車を止めると、まるで仁王像のような巨大セメント彫刻が現れます。「限りなき前進の像」と題する作品。アメリカンフットボール選手と思われる人物がボールを抱えて走る姿を表しています。台座には渡辺浩太郎筆、亀倉康之鑄造の銘板があり、「新時代 築く若さと 指導力」と刻まれています。

この彫刻が建てられたのは昭和39（1964）年4月10日。第19回国民体育大会の開催にあわせて新潟青年会議所が寄付したモニュメントでした。特定のスポーツ競技を題材にした野外彫刻はあまり例がなく、戸惑いをもって眺める人も少なくないようです。

かつては近代オリンピックに「芸術競技」なる種目が採用されたことがあり、国体でも公開競技として「スポーツ芸術」が実施されたことがあります。しかし評価の定めにくい芸術をスポーツと同列に扱うのは難しく、競技としては定着しませんでした。注目されるのは、「特定のテーマと規則に縛られる」ことに芸術団体が難色を示したことです。芸術が自立を主張しはじめた時代、ストックホルム大会（1912年）での逸話です。

もともと彫刻は制作者の自己表現の場ではなく、建築や環境に従属する存在でした。日本でも戦前戦中まで特定の人物を顕彰した作品や、宗教・政治の意図を担った作品が造られました。しかし戦後に

なると、作家は設置の目的や場の特性を独自に解釈し、匿名の人体像にテーマを仮託するようになります。芸術家の創造的な志が、設置者の要求を追い越したのです。

一方この彫刻には、特定のスポーツ競技の現実味がかなりの度合いで残されています。国体に沸き立つ当時の新潟で、球技場にふさわしい記念碑として求められた彫刻だったのでしょうか。しかしここにも、作家の創造的な意思を垣間見ることはできます。制作を請け負った市内の造形家、早川亜美（1912-1980）と金井二郎（1931-）は、「ラグビーの彫刻」という本来の計画を、「ラグビー」とも「アメフト」とも言いがたい中性的な様態に変えているのです。競技種目の具象性より、重圧感を強調する造形的処理を、作者は優先させたのでしょうか。

設置者と制作者の微妙な意思の違いをみせる、50年前の「スポーツ彫刻」。木陰にひっそり立っていますので、ぜひ見つけてください。

木村 一貫（きむら ひとやす 学芸員）



### おすすめの1冊

## 絵図学入門

本書がとりあつかう「絵図」とは、近代的な「地図」が一般化する以前の、中・近世につくられた、空間の図的表現を指します。絵図は、空間のみならずその背景にある社会に対する人々の認識を、今日のわたしたちに伝えてくれる貴重な歴史資料です。

絵図は基本的に、三角測量にもとづく近代的地図のように、精確で統一的な数理的關係から画面全体の構成がなされていたわけではありません。そこに描かれた地形や事物は、その必要から選びとられたものでした。また描かれた山野河海は同時代の風景画の描写と類似しており、文字や記号とともに画面に図示されていました。絵図は博物館の展示資料としてお馴染みのものですが、多くは「必要」なときに特定の人間が特定の目的のために作成されたものであり、万人に向けられたものではありませんでした。

本書は絵図がどのようにつくられたのか、またこうした絵図をどのようにあつかい、そしてよむかを教える、総合的な入門書です。

（安宅 俊介 学芸員）



杉本 史子、磯永 和貴、小野寺 淳、ロナルド トビ、中野 等、平井 松午 編  
東京大学出版会  
2011年7月



# 鍬と鍛冶屋

森 行人

新潟市域を含めた蒲原の平野部では、江戸時代に入ると多くの新田村が成立し、低湿な土地の開発が進められて米の一大生産地となりました。機械化される以前の農業において、欠かせない道具の一つが鍬です。鍬を製作したのは鍛冶屋と呼ばれた人々です。現在では、鍛冶屋を見かけることはほとんどありませんが、昭和五(一九三〇)年の段階では新潟県内で鍛冶業(職業・小分類)を営む者は計五、九〇五人、このうち五、四二一人(九一%)が新潟市・長岡市・高田市を除く郡部に在住し(内閣統計局『昭和五年国勢調査報告 第四巻府県編 新潟県』より)、当時の村々に鍛冶屋が広く存在したことがわかります。

巻や和納、曾根などには数軒、それ以外でもいくつかの集落ごとに一軒の鍛冶屋がいて、それぞれが得意先の農家から鍬の修理を引き受けていました。西蒲区の鍛冶屋からの聞き取りによれば、昭和三十年代頃までは、冬になると農家の田仕事が終わるので、周辺の農村を回って修理の必要な鍬を引き取り、翌春の田仕事が始まるまでに修理を済ませて届けたといいます。というのは、鍬を耕作に使うと刃先が摩耗して使いくくなるため、修理が必要になったからです。修理には段階があるといい、刃の摩耗が軽い場合は研ぎを行い、角がなくなった鍬は打ち込み

にくくなるため、打ち延ばして角の形を作り直したそうです。刃全体が摩耗した場合は新たにハガネを取り付けます。修理を要する頻度は鍬の使い方にもよりますが、一般の農家で二年に一回程度は修理に出したといえます。マタグワ(三本鍬)・ヒラグワ(平鍬)を各二本所有している家では、毎年各一本は鍬を修理に出すことになります。鍬を介した農家と鍛冶屋の関係を過去に辿ってみると、農家の鍬の所有数を示す資料として、文政十三(一八三〇)年、中郷屋村(現西蒲区)百姓孫兵衛方で出火・焼失した農具等の書き上げがあり、「鍬五丁、三本鍬三丁、鎌大小九丁(以下略)」と記されています。持高(〇石程度)の農家では一定数の鍬を所有していたことがわかります。(『巻町史資料編三』五九、六〇ページ)

鍬の修理に関しては、市域以外の例で、文久二(一八六二)年に上組大町村(現長岡市大町)の庄屋今井家が鍬の修理を鍛冶屋に依頼した記録があり、三本鍬一丁の「先掛け」等の依頼や、使えなくなった平鍬をまだ使用可能な中古の鍬と金二朱(ただし五十文引)の差額を添えて交換しています(『長岡市史通史編上巻』五九一―五九三ページ)。この先掛けとは、ハガネの取り付けのことと推測されます。聞き取りと同様に、村の鍛冶屋が農家から鍬の修理を受注していることがわかります。

このようにかつての鍬は、鍛冶屋が一定の頻度で修理することで、長く使うことができました。当時の鍬の製作方法について、西蒲区の鍛冶屋袖山一敏さんに見せていただいたヒラグワの製作工程を紹介すると、まず板状の鉄(ジガネ)を火床に入れてコークスの火で熱します。熱したジガネを割り、動力ハンマーと鎚で割り目を二方向に打ち延ばします。この二本の細く打ち延ばした部位を「手」と呼び、柄を支える木の台(鍬柄)にはめこむ部分になります。また、このように鍬柄に鉄の刃先を取り付けた鍬を風呂鍬と呼びます。ここまでの、おおよその鍬の形を作ることをジヅクリあるいはジゴシラエと呼びます。

この後、ジガネにハガネを付けます。ハガネをジガネに付ける接着剤となるのが「クスリ」です。かつてはやすりの製作工程で生じる鉄くずにホウ酸を混ぜ、水で練って煮たものを砕いて使用したといいます。クスリにはそれぞれの鍛冶屋に秘伝があり、また材料の大きさや製品の種類によって成法が異なります。

ジガネにクスリを塗り、その上にハガネを重ねて火床で熱し、鎚で打ってハガネとジガネを一体化させます。軟らかいジガネの表側だけに硬いハガネを付けることで、ジガネ側を減りやすくし、少々刃が摩耗しても刃先を立て



袖山一敏さんによるヒラグワ製作

た状態を維持できます。このため鍬を使い続けても土への打ち込みを鈍らせずに鍬を使うことができます。それでも、使い続けて磨耗が著しく進めば、前述のように刃先を打ち延べたり、ハガネを付け足したりといった修理を鍛冶屋が施します。鍬の状態を損なわないよう維持する鍛冶屋は、農家にとって欠かせない存在だったといえます。

ただし、洋鉄・洋鋼が普及する明治以前、鉄は貴重な資材でした。従って、鍬の修理の方法や頻度を、聞き取りで得られた近代の事例をそのまま当てはめて考えることはできません。先の文久二年の事例にあるように、古鉄を収集し利用した時代の農鍛冶の技術を、技術史的な視点から検討する必要があります。貸鍬慣行が見られる上中越や、他の低湿な稲作地域の事例と比較を行いながら、市域の鍬を介した農家と鍛冶屋の歴史的な関係について、調査研究を進めたいと考えています。(もり ゆきひと 学芸員)

## 館長日記

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

### 食べない粽

梅雨が明けたばかりの暑い京都祇園祭、五十年余り前に浪人受験生だった私は、山鉦巡幸を見に京の街に出かけた。

「エンヤラー」の掛け声と共に山鉦から撒かれた細長い形の粽なるもの見たとき、「エー!これが粽?」と、三角形の粽しか知らない当時の私には、一寸したカルチャーショックでした。新潟の粽は、笹を曲げ、三角錘の形にしてもち米を入れ、もう一枚で蓋をしてスゲで三角形に縛り上げ、五個二組に結び、蒸し揚げます。その起源は戦国時代であり、保存食の兵糧として重宝されたと伝えられたりしています。

他方、祇園祭の粽は、茎のついたままの笹を半折りに丸め、米粉を入れ、細長い円錐形にし、スゲで茎までグルグルに巻き上げ、七個単位に結んで蒸し揚げ、一つ一つに山鉦の名札を付けています。

スサノオノミコトが貧しい蘇民将来に一夜の宿を求め、その温かいもてなしに、蘇民将来と子孫は疫病を免れると約束した



京都市内の民家の玄関先

といい、粽はその疫病よけの茅の輪を授けたことに由来するとされます。お守りとして玄関先に掲げたりします。中身の形が異なるものや、その形が小さなものもあつたりします。新潟の粽は、今も暑い季節の保存食として重宝されています。京都の粽は、疫病よけのご利益という目的にしたがい進化を遂げ、形だけの中身の無い粽になってしまったのです。すると今度は先祖がえりでしょう。か、インターネットで「食べられる粽」が四条通りの菓子舗で販売、などが見えたりしています。

粽一つでも立ち入れれば、食文化史の面白いテーマとなります。

### 収蔵資料紹介

#### 疱瘡流し

疱瘡(天然痘)は世界中で多くの命を奪った伝染病で、高熱とともに体中に膿胞を生じ、治癒しても膿胞があばたとなって残り、非常に恐れられていた病気です。

日本では、疱瘡は神がもたらすものと考えられ、これを避けたり、回復を願うため様々な民俗が生まれました。護符を戸口に貼って侵入を防ごうとしたり、罹患した際には、膿胞が赤いほど経過がよい、疱瘡神が赤を好む、などといった考えから寝具や着物を赤い色に替えて平癒を願いました。

疱瘡流しは、俵のフタである棧俵に幣束を立て、供え物とともに道の辻に置いたり、川や海へ流したりするものです。疱瘡神を外界へ送るといって観念から行われました。江戸時代、滝沢馬琴の読本『椿説弓張月』に、赤い幣束を立てた棧俵に乗って海を漂う疱瘡神の描写がみられます。

新潟市域での疱瘡流しは、棧俵をサンバイシと呼び、疱瘡にかかった際のみか、種痘後にも行っていた報告があります。

種痘は疱瘡を予防する有効な手段として、牛痘を用いた方法が七九六年にイギリスの外科医ジエンナーによって発見されました。日本では嘉永二(一八四九)年に実施後、広まりはじめます。



明治時代になると、種痘の普及のため政府によって法律が制定されていきます。明治四十二(一九〇九)年に公布された種痘法では、出生後翌年の六月までの期間と数え十歳の子どもに種痘を行うことが義務付けられました。種痘後、接種部分におできができると、善感といって抗体がつかられ接種が完了したことになります。反応がない場合は再接種が必要でした。

新潟の疱瘡流しの事例を紹介すると、数え二歳の種痘後にホシケル、ホシケが出るという、反応が出た後に流す場合もあれば、早く行くと体が楽になるといって反応が出る前に行ったことも報告されています。幣束は赤、白の場合があり、男の子は赤、女の子は白、赤は疱瘡、白は麻疹の場合といったように地域によって違いがありますが、その行為からは、疱瘡を恐れ子どもが無事をお願い心が感じられます。

一九八〇年に根絶宣言が出され、種痘も行われなくなった現在、疱瘡を意識する機会はほとんどありません。写真の疱瘡流しは実際に流されたものではなく、再現されたものですが、本資料は疱瘡を恐れ神としてまつり、病の治療を願った当時の人々の信仰心を伝えるものといえます。

(渡邊 久美子 学芸員)